

十四傾城腹之内

全交作
重政書

腹に心肝の父母あり。惣領の腎六、水をへらす則ば、肺は願で追はれ、脾は虚空に高ぶる。十四傾情、此虚に乗ぜば、手のある奴に、足を付け各算用算談有。手の三年は年一ばい。足の算用三里の灸、手管にはめたる、大妙傾、足の小陰、大淫婦、手の能ない釘の折、足の能ない大生酔手の小便病目にぬり足の大用雪隠壺、どつ經さつ經、おう浮雲、エイやらやつと追止めた。何を留めた、筆を留めたと爾云。

癸丑阪

芝全交



眞に向なつて嘘を吐く圖

おやばしうしせんう いしらかばや

眞に向なつて嘘を吐く圖

眞像 井胸 羅之 馬鹿 於手
 此契て 今日て 三日持 ちんす
 龜甲の櫛 質におい ても五兩 の通用

頭が痒い 頭が痒い 頭が痒い
 頭垢が 頭垢が 頭垢が
 痒い 痒い 痒い
 のしよき 待痒の 質におい ても五兩 の通用

此二腕主名は 此二腕主名は 此二腕主名は
 此二腕主名は 此二腕主名は 此二腕主名は
 此二腕主名は 此二腕主名は 此二腕主名は

手がある 手がある 手がある
 手がある 手がある 手がある
 手がある 手がある 手がある

胸を割 胸を割 胸を割
 胸を割 胸を割 胸を割
 胸を割 胸を割 胸を割

笑ひん 笑ひん 笑ひん
 笑ひん 笑ひん 笑ひん
 笑ひん 笑ひん 笑ひん

三里は 三里は 三里は
 三里は 三里は 三里は
 三里は 三里は 三里は

此處へすゑん 此處へすゑん 此處へすゑん
 此處へすゑん 此處へすゑん 此處へすゑん
 此處へすゑん 此處へすゑん 此處へすゑん

足が冷た 足が冷た 足が冷た
 足が冷た 足が冷た 足が冷た
 足が冷た 足が冷た 足が冷た

すべて傾城花魁の言葉に、ほんにわたしが胸の内を主に割つて見せたうおつす、わつちが心意氣はさうぢやアおつせん、心が見せたいのう、といつて腹を割つて見せた所が、心といふものは心の臓なり。上べと心は

とんだ違ひ斯くのごとし。

「ほんにわたしがこれ程に

思つて居んすものを、

つれない事を仰んす。」

「こんな野暮な挨拶をする客は、尻の毛まで抜かれる。」

「好かねえ客人だけれど、爲になる人だから、まづ斯う泣いて置いて初午でもくゝしつけねばならぬ、ア、可笑しい、アハ、くゝハ。」

「さういふ心とは露知らず。」

「これアノ子や、手前所へ行つて、綾さんのうへにわつちが申しんす、どうぞお前さんの下着をちよつと貸しておくんなんつて。」

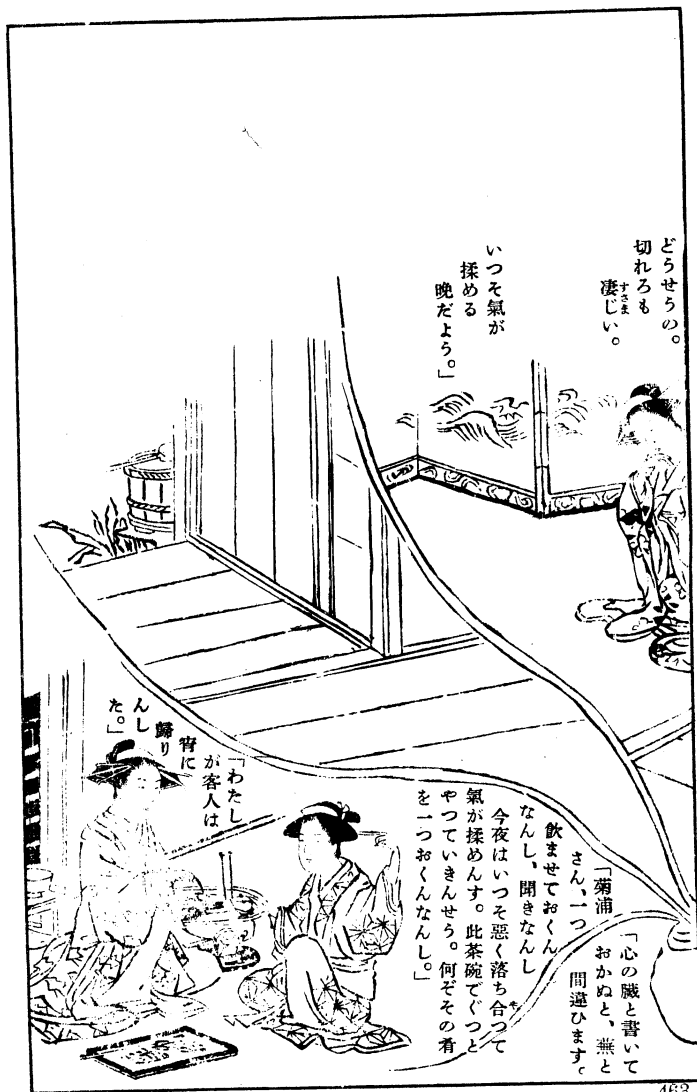
「此子は借りて来やと返辭をいひ、しやねえ、好きなや、お前を切れたら、女房にせうといひやしたわな。」

心といふ物はとんだ氣の多い物にて、客の三四人も落ち合つた晩などは、どうも忙しくて心が轉々してならず、心がいつそ揉めるから、

あくる日火熨斗をかけて、鐵を延ばす、これを氣伸しといふ。氣の伸びる時は手足も伸びをして、ア、昨夕は草臥れんしたなどといふ。

「心の臓は色赤く火に看る、西瓜の心之の臓。」

燈行板



心の臓の次は肝の臓なり。肝の臓は形青くして木に象る。心の臓は腹の内の親玉にて惣先生なり、そこで肝の臓は心の臓の召仕にて萬事萬端、腹の内の事は皆肝の臓の承りにて、腹の中の番頭なり。そこで朝晩三度の食事の出入、今日は茶を何杯飲んだ、酒が幾度、小便が何度、大便が幾度、噎が幾度、あひの物には薩摩芋が二本に大ころはしが三本、肝が幾つ潰れて芋を幾つ食った、鼻頭がぐわんといつて、目の中へ蟻子が飛び込んだといふ事まで帳につけ、毎晩體が寝ると出入算用を



「それでは有氣がさつぱり無い、今日は花魁は精進日と見える。」

「人の膽といふものは、肝の臓について居るものにて肝の臓が御側去らずに居る。」

するから、腹の内の手合は皆肝の臓が支配にて大抵いそがしい事ではなし。

これ皆心の臓への奉公なれば、ほんの肝臓あつて錢足らずの方なり。

方なり。

「脾胃袋は延命小袋といふ氣取にて、何か金持の風をしておとなしい身をしたがる。」

「癩の虫は眞黒にて黒坊のやうなり。腹の蟲は眞白にて、蚯蚓の潤けたやうなものにて、年中ぐなりしやなりと怠けて居て、何ぞといふと、よくかぶる男なり。」

「昨夜はもし親方、わし等は大きにかぶりやした、大根卸に生醫油をかけたやつを食はしつたから大當さ、今日もちとかぶりたい、など、」

兎角強請りたがる。



「今日は朝飯前に、焦つたといとて茶碗酒が一杯、硯蓋に残つた、椎茸が一つつた、蓋茶碗へ入れて」

残した飯へ茶をかけ、これが二杯、菜が菜漬と坐禪豆、

これが朝飯と見えました。」

肝の臓のつぎは腎の臓なり、
腎の臓は形黒くして水なり。

それ故、水舟そのほかいれもの容器小鉢

何でも水のはいりさうなものへは、

やたらに水を汲み込ませ、體の中へ潤うるひを

つけて居る水屋なり。しかも肝の臓とは

直ちきに隣なり合あせて、

別わして懸けん親類同然なり。

随分水を減らさぬやうに商賣大切に

して居れども、強きく心勞苦勞でもある

時や、また、とんだ事で氣を

揉んだり、不養生な事があると、

算用の外の水が減るなり。

或時一夜のうちに腎の臓が所の水、餘程

減りける故、大きに驚き、肝の臓、

脾胃い袋をよび相談する。



「これでもう一夜、此通りに
水が減つてごらうじろ、
わたくしなどは

存まじがけない顎あごで蠅はを
追はねばなりません。

水屋の
煙草盆
どうも
火が保ち
かねる。

「肝の臓様は御隣家と申し一つお腹
の事なれば、早速お届け申します
昨晚旦那心の臓様から何の御届け
も御座らぬに、どういたしたか、
此通り水が減りまして御座る。」

「腎さうな
事では
ない。」

「臓玉にこた
へると申せば、
それこれ」

水の減り
ては是非
どなたへ
でござる
が、
みづもこ
れも
知れない
もんだ。」

ほんの事か、嘘の事か知らねども、
 女の心の臓は形女なり、男の心の臓は男
 なり。心の臓はちと内證にて水を
 つかはねばならぬ事ありしが、五臓
 どもへもいひつけず、内々にて
 これ程の事を隠して遣はるゝを、
 よもや知れまいと思ひの外、腎の臓
 がかたの水の減り様露顯に及びければ、
 家來ながらもあとの四臓共が貶むところ、
 はつと思つて膽を潰すと、直に膽玉にこたへ、
 膽が平たくなつて半分つぶれる。

「お前様は膽が
 つぶれまして手が
 あがりたくは
 ござりませんか。」



「肝の臓
 忠臣な事
 をいふ。」

「あれ膽が
 柳藏を殺す
 陣をす。」

「さて
 こそな、
 だみしや
 ぐみしや。」

「おれは
 お前の
 身所
 思達
 なれに
 やるす。」

心の臓はあとの四臓共がつもる所も
はづかしきとて、大きに心勞して居る
所に、悪い時には悪い事はつ
かり来るものにて、折ふし暮
の事なりしが、暮の仕舞、
正月の紋日、あと着の着物の
當までも、誰さんにはこれ程、
かれさんには斯うと當にした
所が一時に變更の文が來たれ
ば、今度こそは膽がほんとう
に皆潰れ、何處から來ると
なしに、杵や棒が胸より湧き出し、
胸の中は八人搦をしける故、心の
臓が上の方へくつと吊し上り、
てんてこ舞をぞはじめける。
「これ、天手古舞のはじめなり、
餘り見ずとよいものなり。」



「胸がどきどき、躍つて八人搦を
しける故、肝の臓へ響き、肝の臓は
地震の揺るやうに怖がつて動きえゝず。」

▲狂ぢやア
ねえ、
借金
の
狂だ。」

「こんな苦しい時節も
今来る程に、
てんてこ舞、
これから石橋の
まどろみ」

「どつきく
ぶるくく
ア、萬歳樂
萬歳樂は
知らぬが
女郎は
正月が苦
しいぞ。」

客人から断りの文が来て、胸が八人搦^びをして躍り、はつと思つて膽を潰せし故、自體半分潰れかゝつて居た所へ、今度はほんとうにまるで潰し、今まで膽の太いのが、俄かに細くなつて瘦せ衰へ、

みしや／＼と平たくなつて潰れ、大きに煩^{わづ}ふ。膽といふものは、肝の臓の脇について居て、肝の臓の厄介者なれば、いろ／＼看病をしていたはる。

「から潰れきりになつては、男が立たず、腰が立たねえ。これでは當前の膽あたりまへが、ちぎりの膽が潰れる。」

「わたしがなりはあかいる赤蛙を見るやうだ。」



「それは赤蛙といふもんじゃない。それは膽がでんぐりかいる、色が青かいる、どうか風でもひきかいるといふもんだ。」

胸がどき／＼躍つて膽を潰すや否や、癪の蟲は、
 常々人の惡き奴なれば、こゝぞ幸ひと胸前へぐつ
 とさし込み、板のやうに突張つて、
 しませける故、早速虎屋の解毒黑丸子、
 金龍丸、陀羅助まで飲みければ、
 流石の蟲も苦しがり、あつちへ
 潜りこつちへ潜り痛ませけるが、
 銀鍬金鍬の鍬を四五本うちこまれ、
 げつぶげつぶと下りしは
 目覺しかりける次第なり。

「何故これが目覺しいか、どうも氣が知れず。

「腹の虫は臆病者にて、癪の虫が折檻にあふを見て
 虫を殺して小さくなり、ぐうの音も出ずに
 じつとしてゐる。

「丸藥の降る所は、氣の短い人が
 碁をうつやうなり。

「丸藥粉藥、咽喉のあなより雨敵と降り下る。



「けいぶら
 ぐう／＼／＼
 ぐろ／＼／＼」

「玄徳さんの鍬は
 痛い鍬だ、ア、
 苦しい。」

「ア、怖い
 こと哉、
 丸藥が
 頭へ當
 る。あいた
 ぐろ／＼／＼」

心の臓

今度の事にて愈心勞して、

大病となりける故、今は

心の臓も氣の毒に思ひ、女房をみるやうに、家來乍らも介抱してやる。

「又心の臓に小さくついて居る臓にあたらしきといふ新の字を書きて新ざうといふざうあり

これ心の臓のゝ字を抜きたる

ものにて歳を経て心のざうとなると、

ど(こ)のか十四經にあれど、これは餘り

杜撰にして採るにも足らず。それでもさう

書いてあるから、爰に出す、決して

作者の利那尻で、臭き事には非ず。

肝

「肝の臓脾胃袋毎日見舞に來る。あなたの胸の中は、わたくし共がよく存じて居ります。たしか肋骨に有る骨が二本たつて居りました。」



「自らが胸の中ならくわし

かうても
あがりは
なさりま
せぬか。」

「うとくと、こんな大きな夢が、何處から出るかいたはしい、夢は

五臓の煩といへるに違ひなく、心の臓うつらくと氣の減るやうな夢ばかり見る。

大きな沼より姑蘇の泥棒出で、腎の臓を剥きて水を皆絞りとる。

「いや、じんさうに渡せ、

エ、心こゝにあらざれば

視れども夢なり、食へども

その譯合を知らず、

どうだえり

何か一向わからぬ洒落をいふ。こゝが夢なり。

「脾胃肝の二臓曰く、「成程これは大きな夢が咽喉から出た、見るとおいらは居所がねえ。」

「みづからが胸の内を推量してたも。」

「病人の寝て居る内は

頸で蠅を

追はずに

居るから

側で新さう

團扇で蠅を追

つてやるなり。」

「それはいい、はいてはない馬を追ふやうだ。」



腎の臓は水が残らず減りきりて、
 日々顔色瘦せ衰へければ、今は
 腹の中にて虚空に火が充り、腹中
 を氣負ひ廻り、五臓六腑を熱く
 させて喧嘩をしかけ、やけの
 やん八といふ悪者となり、
 腹中が困りはてる。

「これへ、おれを誰だと思ふ。おらアやけのやん八さんといつて、火の方ちやアたかい男だ、腹中でおれを知らねえ者はねえ、
 采女がはらでも、天文はらでも、
 廣小路に通つたもんだ。
 何のこつたえ、はらしのやうな。」



「かうあらうと思つて、火の用心をしてゐた。」

「わしはこれ若衆へ世を渡し、腎虚した者ちや、そのやうに火どく言はぬものぢや。」

「口惜しくば水を出てみる、水はあんめえ。」
 「おちいが飽めえ、水あん八文も賣る。」

酒の好きな者の腹の脾胃袋の脇に酒が
五升も三升もはいる徳利のやうなものが
あつて、それへ皆はいつて了ふといふに
違ひなし。花魁の腹の中に飴色の徳利
がありて、晝夜飲む酒がこれへ皆収まり、
腹の中の酒屋のやうなものなり。膽玉は
潰れてよりこの方、膽が細くなつて煩ひ
ける故、色々療治せしが、酒を飲み飲み
すれば、膽が太くなるものと聞いて、毎日徳利
が店へ來て居酒を飲みければ、だん／＼膽が太
くなり、今では酒屋に借が出來ても、どうする
もんだ、借金で首足はもげめえしなど、
いけしやア／＼と膽が太くなつてゐる。

「咽喉にぐい／＼虫といふ虫が
あつて、人の酒を飲むのを
見ては、ぐい／＼として飲みたがる。
ぐう／＼。」



「頭から
うまい／＼
と飲むは、
味増ちやア
ねえが、おれ
と嫁だらう。」

「ゆうべ入つたのは劍菱だ
それ／＼どうだ。」

腎の臓の次は肺の臓なり。肺の臓は色白くして

金に象る。しかも心の臓をとりまいて守る役

なり、心の臓は此の肺の臓が

うちの真中に

大きな面をして坐つて居て、人ばつかり

使ふ奴なり。そこで肺の臓が商賣は

萬事聲を發する役にて、淨瑠璃でも長唄

でも、おちやつびいでも、おしやべりで

も、皆この肺の臓から出す事なれば、

これは腹のうちでの藝者なり。そこで

痰が起つても、咳を咳くのも、此の男が

係なり。腎の臓が水が減りし故、肺の臓

は無性にござりく〜と咳を咳いて、晝夜

に痰が耳盪に半分程宛出でける故、商賣

の淨瑠璃、長唄も語られず、稽古も

休んで居た所へ、花魁の不養生、醫者殿が

食ふなといはしつた茄子の生漬と里芋を

隠して買ひにやつて食ひける故、大きに

「いかに痰でもそんなに絡んだ事をいふ事はねえ。それではおれが面は立たないでもないが、聲が立たぬ、潰れきりだ。」

「自體咳の出る所へ貴様がさう怒つてはたまらぬ。ごほん〜うふ〜〜。けん〜〜。」

「咎もないおれに、茄子野郎や芋野郎が當つたり觸つたりするで、いはねえ、いやだ〜、合點しねえ〜。」



四十傾城腹之内

痰に當り、痰は恐しく怒つて暴れ出し、
稽古所をぶち壊す。

「咽喉のあなより里芋と茄子の生漬

ばら／＼落ちて痰の頭へ當り、
痰は大きにせき込んで怒る。

「蟲共は間々にぐう／＼と

唸りてみたがり、肺の臓

が所へ河東節の稽古に

來かゝりしが、痰がおこつて、

淨瑠璃が出来ないと

痰をなだめる。

「これ、おれも癩の蟲だ、

一番げつといつて鎖まつて

下さい。さういつて蟲を潰す氣か。」

「これ、餘り

短氣と

いふもんだ。」



「な、黄痘
にならア。」

「じやう
だんを
され。」

四十傾城腹之内

火はだんく腹のうちを亢^{たか}りて
 歩き、後にはおへなく人が悪く
 なり、鐵火^{てつゐ}の如く活氣^{くわき}強く熱く
 なりし故、着た物を一枚脱ぎ
 二枚脱ぎ、だんく脱いで、
 今は襦袢^{じゅばん}のやうな物一つ着て
 火焰^{くわん}の姿になり、酒德利^{さとし}が店へ来て、
 酒を飲んでぶうくをいふ。

「咽喉^{のど}のあなのぐいぐ蟲、これも德利が店へ
 来て、あし無しの酒を飲みたがり、
 依怙^{えこ}地悪く強^{こは}りたがる。」

「これ親方、わしはぐいぐ蟲の
 のど平といふもんだ。
 一ばい飲ませて
 下さい。」

錢は
 此頃に
 やらう。」

酒
 頭

「其頭の德利を一杯いきたい、
 冷てもいよ、燗^{あたた}は
 おれが火で勝手にしべい。」



「お前は
 餘り蟲
 のいふ
 事をい
 ひなさ
 る。そ
 れは
 蟲ては
 ない。」

わしが店の
 油蟲だ。」

「燗酒
 は居
 ながら
 銘酒を
 飲む亭主
 は居ながら
 迷惑
 する。」

膽玉は毎日酒を飲んで、飛んだ膽が太くなり、火も段々充りて、人が悪くなり、今はぐいぐい蟲、三人共に惡者となり、いひ合はせ、酒屋が頭に載せける大事の徳利をひつたりて來り、三人酒を暴れ飲みにして腹中を暴れ歩く。今までは花魁が冷酒が好きで、徳利の中の酒は冷ではつかりありしが、火が頭にて燗をして飲むから當らず。

「おれも頭て燗をして酒はつかり飲んで居てもつまらぬ。春から藥研堀の不動へ火燗奉公に住んで一年苦しむと、此借錢は抜けらア。」

「小さい子が月代を剃るやうだ、氣がつまる。此頃頭を干しておいたからよく燃える筈だ。」

「焦れつたい、早く頭を燃やさつせい。持病のぐいぐいが起つた。」



さて肺の臓の次は脾の臓なり。これは黄色にして
土なり。即ち脾胃袋の事なり。されど脾の臓と
胃の腑と二つ合せて脾胃といふ。脾は一切の食物を
こなす役、胃は食を受けとる役にて、朝晩の
食物を皆こゝへ入れてこなすから、腹の内の
甘物屋なり。夜々通り町へ出る屋臺店のやうな
もの也。

心の臓は快氣しけるが
餘り食ひ込んだ故、脾胃袋が
少しいたみ破れかゝりし故、
心の臓氣の毒がる。
「あんまり破れの大きくならぬうちに、
心の臓脾胃袋の破れをこそくつてやる。」



「これがほんの
脾胃虚の引倒し、
やぶれ

かぶれと
いふもんだ。」

心持の
いはもの
だ
ちと睡氣が
来た。」

「頭の破
れを縫つ
て貰う」

「脾胃袋のうちの若い者脾胃蔵胃蔵の二人、

毎日の食物を米を搗くやうにこなして

大腸小腸の經へ渡してやる。大腸へ

落つるは大便となり、小腸へ落つるは小便となりて

下る。これ下り米を搗くやうなり。

脾胃蔵胃蔵ひいひいといつて働く。今の世に

切ないのを、ひいひいといふのは此謂なり。

「これから梅干の種の丸呑と

鰯の足を二本

こなさねばならぬ。」

「昨日の團子は
早くこなれたが、
けふの

牡丹餅は

上り

かねる。

梗の混つた

せいか。」

「おれが名も
脾胃蔵とは錢のねえ
名だ。」



薩摩諸をたんと食はれければ、
腹の蟲に當りてかぶりける故、
反魂丹を飲みければ、大きに
薩摩諸と達合ひ、
大喧嘩となりて食滞しける故、
五臓六腑それ喧嘩よと上を下へ
とひつくりかへり、
命門を打ちて大きに騒ぐ。

「喧嘩く、
抜いたく、
かちく。」



「反魂丹の蟲殺し、出合へ〜
匙を抜いておれを殺した
儘に下手醫者の
持った匙だ。」

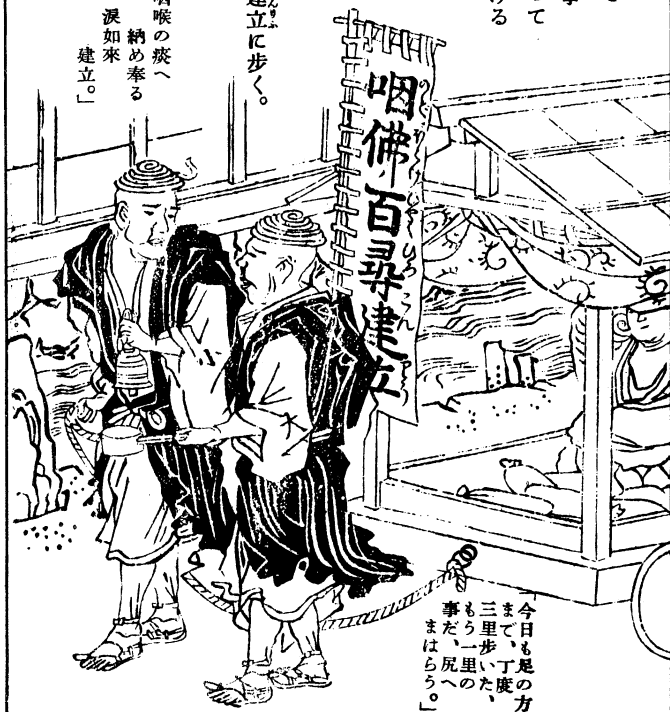
「さきから此本を
見る見るに、丸薬、
里芋、茄子ども
は、皆生で
かいてあるに
何故手前
とおれは
人間に
かいてあつて
喧嘩をするのだノウ。」

「さればさ、そこが
腹の内事は
知れぬもんだ。」

「いやいもく
まいぞ
何と餘り
新しからう
がや。」

大腸經、小腸經は腹の中に隣合つて居るものにて、ぞくにいふ百尋の事なり。何か薩摩諸と反魂丹と達合つてより、無性に上げたり下したりしける故、咽喉のぐりぐりの咽喉佛がだいなしに損じ、また下る方では大腸小腸の百尋が大小便の受持なれば、これも餘り下り過ぎて、百尋をだいなし悪くし、今は咽喉佛と百尋の療治最中なれば、大腸坊、小腸坊、咽喉佛、百尋の建立に歩く。

「咽喉の痰へ
納め奉る
涙如來
建立。」



大便は大腸より大便道へ下り、小便は小腸より膀胱經に渡り、これより尿り下る。此膀胱經といふは、俗にいふ小便袋の事にて、殊に婦人の膀胱にはいろいろあり、まづ花魁のは勤ぼう公、それから下女のが飯炊ぼう公、かゝアの出るのが姥ぼう公、ばアさんなんぞは雇ぼう公、娘の出るのが妾ぼう公、そこで小便組といふ事もなきにしも非ず。

「又昔の黒焼にしたのは、癩の虫の根を切るといふ事にて、肝の臓菅笠の黒焼を持つて癩の蟲を退治する。

思ひ知つたか、

ちゅーじやーじやアー。

「此所小便無用といふ札を出さぬが、おれが

不念だ。

ハテ不念だナア。

これは無念の拔よ。」

「戀はをなごの癩の種

といふが、わがその面では

恐れ入る。」



「咽喉のぐいぐい蟲は、いくら酒を
飲んでもぐぐびつく奴にて、後には
面倒がりて徳利へ首を突込んで飲まん
とする所を、徳利の口ぐいぐい蟲が
咽喉笛にしっかりと喰ひつき、

蟲を食ひ殺す。

「南無三

とつくり往生だ、

だア引。」



「徳利へ指を
突込んで
抜けねえとは
違ふぞ。
どうだ。」

腹の中^{うち}に障子骨といふ高麗屋^{かうらいや}縹^{じま}のやうな骨あり。昔笠^{かさ}の黒焼^{くろやき}にて癪^{さく}の蟲^{むし}は消えけるが、どうしたか、

そのかさの藥毒^{やくどく}が残り、障子骨の骨絡^{ほねがらみ}となりて、いくら引張つても、これがとれかね大きに難儀^{なんぎ}する。これ客人の置いて行きしかさにや、かさ當^{あた}の所に膏藥^{かうやく}を張つたあとがある。

「かさの骨絡^{ほねがらみ}になりし故^{ゆゑ}、物言^{ものいひ}が鼻^{はな}にひつかゝりて鼻の障子^{はなぢり}が下へ落ちる。鼻の障子^{はなぢり}は小さな障子にて火が充^{たか}つた時分^{ときぶん}、鼻の穴^{はな}をだいなし燦^{ふすま}らせる故^{ゆゑ}、真黒^{まぐろ}く煤^{すす}び破れて落ちる。



「みりくく、強くひつぱると、骨が折れる、骨折^{こねしり}だ。」

「南無三、鼻の障子^{はなぢり}が落ちる、しやうじ千萬^{せんまん}、ふがくく。」

「鼻^{はな}は肺^{はい}の臓^{ぞう}が受持^{うけもち}にて頭^{かぶ}へ障子^{ぢり}が落ちて、穴^{あな}があく。」

かさは骨絡みとなり、とれかねける故、
 上手な醫者にかゝり、五寶丹の下しを
 飲みければ、かさは皆粉々になりて、
 骨を離れ、大腸小腸が受持の孔より
 瀧の水の落ちるが如く下つてしまふ。
 鼻の障子もひとりでに鼻へはまり、
 舊の如くしやんとしたい鼻となり
 残らず病の根を切りてしまふ。
 「腹の中に土手のやうな所あり。
 それより瀧の落ちる如く病下る。
 俗にこれをどてつ腹といふ。
 「膽玉は酒を飲みて、大きに太く
 なつて人が悪くなりし故、
 五臓共に大きに叱られ、小さく
 なつて、どてつ腹の脇に
 堅くなつてゐる。



十四經情その任脈の人柄によつて、蒟蒻の
田樂で酒を飲んでも大に督脈の附く事あり。
いはんやおまんまに於てをや。

一切の食つたり飲んだり納る所は

脾胃袋にして、まことに息災延命袋と

うやまふべきは脾胃袋也。殊に

花魁は勤のうちの堪忍袋、かたづいた

先でも始終お袋様と崇められ、金袋を

たんと持ちて、年々春袋を贈らば、

いかばかりめでたしと、何のこんな

絲瓜の皮の段々な草雙紙なれど、

御子様方の御最良を以て

袋入の本ともならば

版元鶴屋が大仕合

めでたう一つ打ませう。



芝全交戯作



しゃんくく